

## 「幕チャリ」メンバーによるカンボジア・フィールドツアー 報告書

神田外語大学 CUP

藺田奈央子（第5回幕チャリ代表）

### 【趣旨】

2005～2010年の5年間で、幕チャリから公益信託「アジア・コミュニティ・トラスト（ACT）」へ寄付した総額は7,501,000円（2010年12月現在）にのぼる。この寄付金はACTを通してアジア各地のNGOに助成され、現地の人々の自立支援に活用されてきたが、その実情に直接触れる機会はこれまでなかった。そこで、今回初めて、幕チャリのメンバーで「現場」に赴き、どのようなインパクトがもたらされたかを実見すべく、ACT事務局の協力を得て、カンボジアへのフィールドツアーを組織した。「寄付して終わり」ではなく、その資金が活用されている「現場」から学び、幕チャリの意義を考え直すとともに、幕チャリが果たしている役割を広く共有するためである。

【訪問期間】2010年11月25日（木）～11月29日（月）

【参加者】神田外語大学CUPのメンバー12名

佐藤 謙（4年）、藺田 奈央子（4年）南 亜也子（4年）古澤 佳純（4年）  
澤井 祐希（3年）、中村 綾（3年）、濱中 望帆（3年）、吉田 祐弥（3年）  
衣笠 円香（2年）、中村 友莉子（2年）、二重作 綾香（2年）、高橋 愛（1年）

【同行コーディネーター】特定非営利活動法人アジア・コミュニティ・センター21  
事務局長 鈴木真里さん、広報 上田真弓さん

### 【訪問先】

11月25日（木） カンポート州「CEDAC（カンボジア農業開発研修センター）」事業地域（2009年度までのACT助成対象）の農民協会メンバー・精米組合との会合、農地（実践現場）見学 →（地図①）

11月26日（金） コンポンチュナン州「CEDAC」事業地域（2010年度からのACT助成対象）の農民協会メンバー・精米組合との会合、農地（実践現場）見学 →（地図②）

11月27日（土） 「FLD（農民の生計開発団体）」および「CARD（農業・農村開発センター）」カンボジア現地事務所代表との会合 →（地図③）

11月29日（月） トンレサップ湖 Prek Toal 村と Kompong Prohoc 村の縫製ビジネス・グループおよび手工芸品製造グループとの会合、現場見学 →（地図④）

## 【所感】

幕チャリからの寄付金が活かされて、現地の人々の暮らしは確実に良い方向へと変化していた。幕チャリが毎年お金を産み出し、その資金が ACT を通じて現地の NGO に助成され、最終的に村人への自立支援に役立てられる 방식을 5 年間継続してきたが、その成果は着実に実っていた。その最大の理由は「継続的な自立支援」にあることは間違いなく、ACT へ寄付し続けてきたことが正しい選択であったことを確信するとともに、今後も ACT とタグを組んで自立支援を継続することに積極的な価値があることも確信した。

参加者からは「無理してでも参加してよかった」という感想が圧倒的で、フリーマーケットを開催して売上金を寄付することで日本での幕チャリは「完結」するが、支援先の現地にとっては、実はそこから「出発」であるという当然の事実を改めて実感する機会となった。幕チャリの活動が海を越えて仲間の力になっていることを体感できた今回のフィールドツアーは、これからの幕チャリの発展にとって新たな力になるだろう。

ACT 側もこうしたフィールドツアーの重要性を再認識し、今後も定期的にツアーを組んで幕チャリ・メンバーと現地の人々との交流を深めるとともに、幕チャリと ACT とのパートナーシップも充実させていきたいとのことであった。

詳細報告は後述の通りである。



## 11月25日(木)午前:カンポート州「CEDAC」事業地域(2009年度までのACT助成対象)の農民協会メンバーとの会合、農地(実践現場)見学

ACTのパートナーである現地NGOの「CEDAC(カンボジア農業開発研修センター)」のField Program Directorを務めるキムタンさん(写真①左の男性)が1、2日目の現地訪問に同行し、解説や通訳をしてくれた。前日に首都プノンペンからタケオ州まで移動し、カンポート州までバスで向かった(移動時間約4時間)。綺麗なホテルやレストランが並ぶプノンペンから少し離れると、家はほとんどなく、水田が広がる田舎の景色が広がった。目的地へと続く道はでこぼこで、バスが通るたび砂埃が舞っていた。至る所で舗装工事が行われ、経済発展を目指すカンボジアの姿を垣間見た。(写真②)

写真①



写真②



写真③



現地訪問のスタートは、農民リーダーのビンさん(写真①中央の男性)のお宅。ビンさんが住むこの村(250世帯)では、2006年にCEDACの仲介により農民協会が設立され、当初参加した農家は10世帯だったが、現在は85世帯にまで広がった。ビンさんは妻と4人の孫の6人暮らしで、孫の両親は市内に出稼ぎに行っている。専業農家では十分な収入が得られないため、このような家族の在り方はカンボジアの農村地帯では少なくないという。ビンさんは、CEDACからのアドバイス受け、SRI(集約的稲作法で、農薬を使わずに収量が2~3倍に伸びる新農法。写真③)や、一つの畑で多品種の野菜を作る多目的農業(写真④)、バイオガスの活用(写真⑤)等、様々な取り組みを披露してくれた。暑さに疲れた私たちに、自慢のきゅうりをその場でもいでご馳走してくれたが、瑞々しく甘いきゅうりだった。

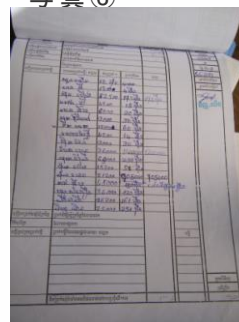
写真④



写真⑤



写真⑥



この村の農民協会では、CEDAC の助言に基づき、貯蓄・融資グループを設立している。このグループが出来たことにより、村人は利子 10%という高利貸しに頼らずに済み、村の仲間による相互扶助が可能になった。利子が 3%で済むだけでなく、村落単位で資金の貸し借りができ、村内でお金が流通し、村の経済活性化に繋がるため、メリットは大きい。現在の貯蓄総額は 1 億 5 百万リエル (約 216 万円) だそうだ。貯蓄・融資者の氏名、金額、日付は写真⑥のように、リーダーによって管理されている。ビンさん自身は、4 年間で約 2,500 ドル (約 21 万円) の貯金ができ、今では老後の不安もないそうだ。ビンさんだけでなく、村人全体にメリットが及んでいる現状は非常に嬉しいことであった。

### 11 月 26 日 (金) 午前 : コンポンチュナン州「CEDAC」事業地域 (2010 年度からの ACT 助成対象) の農民協会メンバーとの会合、農地 (実践現場) 見学

首都プノンペンからコンポンチュナン州まではバスで約 3 時間。バスから見る景色は、前日のカンポト州の埃っぽい景色と似ていた。小さなお店や家はまばらで、体に見合わないサイズの自転車を乗りこなす生徒が、元気にバスの脇を通る。周辺の学校は午前と午後の部に分かれていて、家の手伝いをしながら学業をする子供がほとんどだという。2 日間の訪問地 4 か所全てがバスの通れない村奥にあったため、私たちはあぜ道に一本の行列を作り歩いた (写真①)。列をなす 12 人の訪問者を村人たちは物珍しそうに見ていた。

写真①



写真②



写真③



2 日目午前の訪問先は、有機米栽培のグループ (写真②)。このグループも SRI を導入し、収穫量が格段に向上していた。2008 年に 300kg しか収穫できなかった同じ土地で、2 年後の 2010 年には 1 トンものコメが収穫できるようになった。前述の村より SRI 導入が 2 年遅いこともあり収穫量はまだ少ないが、このまま SRI を続けていけば土壌が改善され、収穫量は更に伸びるだろう。有機米は、一般のコメよりも 100 リエル (4 円) 高く買ってもらえることから、彼らの収入は着実に増加している。有機米かどうかのチェックは、グループ内部と CEDAC が行っている。2 日間にわたって、SRI に関する話を聞いたことで、SRI の理解が深まった。SRI は、生産性をあげるだけでなく、化学肥料にコストがかからないため、収入を増やすよりよい農法であることがわかった。

1、2 日目のお昼は、村の農家の庭で育てている鶏や野菜、魚を使った家庭料理をご馳

走になった（写真③、④）。カンボジア・クメール料理で有名なパクチーがふんだんに使用された料理は日本ではなかなか食べられない。食べ慣れない味付けや食材に苦戦している者もいた。

食後に訪問した農家は、稲作の他に養鶏と養豚に取り組み、CEDAC にアドバイスをもらうようになってから3年が経っている。写真⑤は養鶏用のえさ。合成飼料から、米ぬかや薬草を使った天然素材のえさに変えたことにより、鶏の死亡率が激減した。鶏を選ぶ際や、育て始めが肝心だそうで、CEDAC からのアドバイスの恩恵をしっかりと受けていた。カンボジアでは鶏の放し飼いが普通だが、こちらの農家では高床式の小屋で鶏を大きき別に飼育するという工夫がされていた。写真⑥は、ハロゲンの熱を利用して20日程度で卵を人工的に孵化させている様子。キットを購入し、卵を定期的に回転させるだけで、ほとんど手間がかからない。こちらの農家では、3年間で月収が5倍になり、4人の子供を学校に行かせることができる十分な収入が得られているようだ。CEDAC からのアドバイスを活かし、自ら新しい取り組みに臨む姿勢を見ることができ、CEDAC の力だけではなく、本人の自助努力も伴わないと、継続的な収入向上には繋がらないと実感した。

写真④



写真⑤



写真⑥



#### 11月26日(金)午後:コンポンチュナン州「CEDAC」事業地域(2010年度からのACT助成対象)精米組合との会合

午後になると日陰に入り、ハンモックに揺られながら昼寝をする村人があちこちで見られる(写真①)。カンボジアの日中の気温は40度近く、この時間帯は家で休憩していることが多い。ゆっくりと時間が流れているように感じた。ポル・ポト政権下での集団的労働搾取という歴史的背景から、カンボジア人は今でも集団で働くことや組合(Cooperation)という表現を嫌がる傾向がある。しかし、現在は、組合や団体なども結成され始め、こういった傾向は薄れつつある。

1、2日目の午後は、それぞれの州にある精米組合を訪問した(写真②)。2009年に設立された新しい組織にも関わらず、株(今回の訪問先は一株12.5ドル、25ドル)、総会、配当という株式会社のような仕組みがあることに驚いた。組合が出来た背景には、稲作農民が仲買人に安くコメを買い叩かれるという現状があった。その理由として、農民個人は情報を持っていないため、変動するコメの価格を知らず、適正な価格がいくらかわから

ないことが挙げられる。その状況を改善するために、CEDACの仲介により組合が結成された。仲買人との売買を個々人ではなく組合というグループで行うことで、力を持つことができる。適正な価格で仲買人にコメを販売することができる。精米組合が稲作農家から適正な価格でコメを買い、仲買人やそのコミュニティに住む村人に販売をする仕組みである。

写真①



写真②



人目に見えない倉庫の奥に大切に保管されていた精米機(写真③④)を購入するために、資本金3,800ドルが投資されていた。粳が1,000リエル/kg(25円)に対し、精米した米は1,800リエル/kg(45円)で販売できるからだ。できるだけ多くの量を稲作農家から買い取るために資本金を増やすことが、今後の彼らの課題である。設立されたばかりの両組合が抱える課題は多いが、ひとつひとつ課題解決に向けて取り組む彼らの前向きな姿勢が印象的だった。

写真③



写真④



## 11月27日(土)「FLD」と「CARD」カンボジア現地事務所代表との会合

FLD（農民の生計開発団体）の事務所がある首都プノンペンには、人口約100万人で、農村から出稼ぎに来た若者や観光客で賑わっている街である。1950年代前半までフランスの領地だったこともあり、フランスを彷彿させるコロニアル風の建物が見られる。先進国の支援によって建設された建物や橋が経済発展の勢いを感じさせる。綺麗で壮大なマンションに住む富裕層と路上で生活をする貧困層が共存する都市である。

ツアー3日目は、FLDのスタッフ、CARD（農業・農村開発センター、本拠はフィリピン）カンボジア現地事務所の代表との会合を開いた。FLDは2002年に設立され、生産性の向上、雇用の創出と促進、小事業の改善、食の安全と生活環境の改良のための実践を地域社会と共に励むことを使命とし、正義、共感、平等、持続性、誠実という価値観を大切にしている組織である。パワーポイントを使用し、FLDの仕組みや実績、カンボジアにおけるマイクロファイナンス（MF）事情についてプレゼンをしてくれた（写真①）。良い面だけではなく、リーマンショックの影響や貸し出し最低価格の引き上げ等によりクライアントが減ったこと、MFの需要があるにも関わらず経営存続のために対象地域を絞り、コスト削減をしていること等、現在抱えている深刻な課題も説明してくれた。

現在カンボジアでは、200を超えるMF機関が存在し（ライセンスはなくお金の貸し借りをを行う事業、NGOを含む）、競争が激しくなっている。競争激化により、本来の目的を忘れて収益を挙げようとするMF機関が増えつつある。顧客層が、MFの本来のターゲットであるべき農民からミドルクラスやアッパークラスに移行し、農民の手の届かない組織になっている現状がある。FLDも、多くの人にMFを提供したいが、今後の持続的な経営のために利益を出していかなければいけないという、使命と経営存続のジレンマを抱えている。そこで、FLDはCARDが培ってきた知識や技術を提供してもらい、村落ベースでのMF普及を目指している。CARDはフィリピン最大規模のMF機関であり、利益を出しながらも社会的使命を忘れずに活動している信頼の置ける組織である。現在は、隣国のベトナムやカンボジアにおけるMF機関の能力向上に協力している。

FLDは現在、助成金なしでは経営ができない状況にある。その理由は、農村地帯の貧困は酷く、自分たちの資本金だけではスピードが遅いだけでなく、十分なサービスが行き届かないため、一刻も早く貧困脱却への取り組みをしなくてはならないと考えているからだ。社員の給料も助成金から捻出されている現状に対し、FLDのソミスさんは、「MFはあくまでビジネスであり、助成金に頼らない仕組み作り、組織体制にしていきたい」という意気込みを話してくれた。また、CARDカンボジア現地事務所代表は、「貸したお金が返ってきて終わりではなく、貸したお金が何に使われて、その家族にどう変化を与えたかの指標が重要である」とCARDの社会的使命を話してくれた。彼らの熱意にあふれる眼差しや発言から、必要とされているのは一方的な“援助”ではなく、あくまでも“自助努力への応援”であることを再認識した。

FLD は 4 つのプログラム (Livelihood Development, Support to Knowledge + Inspiration for Live, Farmer Fund, Khmer Farmer Product) を持ち、この 4 つは相互に交わっている。その一例として、FLD からの支援により Livelihood Development プログラムで専門的な技術を得た人が商品を製作し、Khmer Farmer Product プログラムに参加している人が販売をしている事例も見せてもらった (写真②、お店の様子)。

写真①



写真②



## 11 月 29 日 (月) トンレサップ湖 Prek Toal 村と Kompong Prohoc 村を訪問

ツアー終了後に観光としてトンサップ湖を訪れる予定だったが、FLD のご厚意により水上村 (写真①) を急遽案内してもらえることになった。FLD が他のドナーから (ACT ではない) 支援を受けて、若年女性向けに行った職業技術訓練 (2010 年 4 月から 4 ヶ月間) の参加者が暮らす 2 つの水上村を訪問した。

トンレサップ湖は東南アジア最大の湖で 120 万人もの人が水上生活をしている。湖の面積は、乾期の場合 3,000 平方メートルで、雨季になると面積はその 3 倍以上の 10,000 平方キロメートル (琵琶湖の 15 倍) になる。湖上には、高床式の家に加え、学校、病院、教会などの公共施設が建ち並び、雨季の移動手段は全て船である。人口のほとんどの人が漁業で生計を立てている。

写真②は、FLD から縫製訓練を受け、縫製ビジネスを始めている女性グループ。共同で使用する部屋がない小さなグループ (写真③) は、家にミシンを置いて在宅縫製という形でビジネスをしている。どちらも私たちと同世代の女の子だった。両親の漁業の手伝いがあるため彼女たちの教育は小学校 2 年生で止まっていることを知り、ショックを受けた。彼女たちは満足のいく勉強も技術も身につけられないため、市内に移りたいとの希望があっても市内では雇ってもらえないという。生まれも育ちも湖で、一生湖で暮らす人がほとんどだそうだ。FLD からトレーニングを受ける前までは、魚の頭を切る仕事 (40kg/1 ドル) や網を修理する仕事 (1 件 2 ドル) で十分な収入を得られなかったが、現在は月 20 ~ 50 ドルの収入があり、家計の支えになっている。彼女たちは資金がないため、売れる



かどうか当ての無い服をあらかじめ製作することはできず、現段階では、製作する服は全てオーダーメイドだ。一人の女の子が恥ずかしそうに自分で作った Y シャツを見せてくれた。丁寧で丈夫な作りだった。Y シャツは 1 枚あたり 1.25 ドルの収入になるそうだ。

写真①



写真②



写真③



次に、ウォーター・ヒヤシンスのツルを使い、カバンやマットなどを製作するグループを訪問した(写真④)。FLDは、村の人口が増加する一方で漁獲高が減少している現状を改善するために、このように漁業以外の産業を村人に紹介している。湖に無数に広がるウォーター・ヒヤシンスを活かしたこのビジネスに魅力を感じた。ツルを乾燥させ(写真⑤)、ひとつひとつを手で丁寧に編みあげていくバッグには温かみがあった。彼女たちに編み方を教えてもらったり(写真⑥)、バッグに対する改善点の意見交換をしたりした。縫製やバッグ作りの技術を身につけることができ嬉しそうな様子を目にし、技術を提供してリソースの活用に踏み出すことが彼女たちの自信と誇りに繋がり、漁業よりも将来性があるように感じた。

写真④



写真⑤



写真⑥

